

第 12 分科会「里山と Webgis 情報の活用」

テーマ：市民情報と行政情報が、統合 GIS により融合した情報発信が可能か

日 時：2008 年 5 月 10 日（土）

場 所：Qiball（きぼーる）13F3 号室

参 加 者：32 名

スタッフ：荒尾稔、加藤賢三、荒尾繁志



内 容

この第 12 分科会は「里山と Webgis 情報の活用」として、「市民と行政情報が統合 GIS による融合した情報発信」を可能にできるかを中心に、市民情報、そして生き物情報等の収集と、それを合理的な手法で監査済み情報と高め、統合 GIS として、情報発信を実際に実践されている方々と、働き掛けを強く行っている皆様にご参加を頂きました。

はじめに 4 名のパネラーの方々からの報告と、パネルディスカッション、ワークショップと形を変えながら、多様な意見の表明がなされ、流れの中でその考え方と現状、そしてこれからを話していただきました。

プログラム及び講演者

- 1 ペだぼーど→生物情報→統合型 GIS による京都府民への情報公開の流れ
「京都府自然環境情報システム（ツキノワグマ版）」京都府立大学大学院生命環境科学研究科教授田中和博
- 2 20 年に及ぶ雁鴨白鳥の市民や研究家の調査情報を融合化して情報を発信
「環境省インターネット自然研究所(全国ガンカモ類飛来情報)」日本雁を保護する会 会長 呉地正行
- 3 千葉県内の里山「ムクロジの里調査 2004-2007」市民による情報収集手法と調査データのありかた
千葉県四街道市「ムクロジの里」事務局長 山崎輝清
- 4 「電子地図を用いた環境情報の共有に関する試行からみてきたこと」
NTT データ製「ぺたぼーど」を利用の市民情報収集発信システム NPO 法人八千代オイコス 寒川 裕
総合ディスカッション「里山と WEBGIS 情報の活用」及びワークショップ
田中 和博、呉地 正行、山崎 輝清、加藤賢三、
総合司会 荒尾繁志

全国での現状

山崎様

四街道の里山「ムクロジの里」での「生き物調査」での調査実証は、まさに新しい時代での里山の再生へ大きなヒントを提示いただけたと思います。なんといっても自分の好きなことをやって、それが生きがいだと。自分達なりに何年もかかってもフオームを作りながら、それをもって地域の方が共同して、その里山の隅々までが、年間での季節ごとの植生や、魚や蝶や、分かってくる。

里山の事実を知る、現実を把握する。そして、「生きものとしての」年間単位での里山のリズムをつかむ。そこで蓄積された情報を、その調査に参加している全員に情報として共有される、それが「ムクロジの里」での山崎様の話です。

かつて里山が豊かな産物を生みだされていた時代、里山を所有する農家の方々は、自分の畑として、春のたけのこはどこに、秋のキノコはどこかの木の下に、という自然が生産してくれた収穫物を得るために努力してきた、そのためには複数の世代にまたがりながらも里山の隅々まで、何が生まれるかを知っていて手入れを怠らなかった、まさにそれと重なります。



呉地様

環境省生物多様性センター、インターネット自然研究所「全国ガンカモ飛来情報」にて、国の管理する情報と、ナチュラリストや研究家の方々が膨大に蓄積した情報が共生して、融合された環境が公開されています。そのシステム開発ができるまでの過程を、ご発表いただきました。

また、「ふゆみずたんぼ」という、全国各地で実践される新しい農法確立と、それを側面で支える「田んぼの生き物調査」では、その手法の発見から実践に至る過程で、考えられないくらいの創造性と、田んぼへの生物による発酵技術の活用、抑草技術の開発など、先駆者として高く評価されています。日本の農業現場で2,000年以上蓄積してきた先人の多くの知恵のありかを再発見するきっかけを作ったということです

寒川様

「ぺたぼーど」の使い方は、はじめに事実情報を速報で集めて、双方向で議論するという。まさに IT を駆使した新しいコミュニケーションの方法を、八千代市で実証しながら提案いただきました。

田中様

市民が収集した市民情報を、それぞれの地域のコーディネーターの方々が自分で整理して、いつだれが観察し、報告し、誰が監査したかという順序で、まとめ上げてしっかりと監査を行い、その中から行政に報告する。あるいは行政の情報と自分たちの持っている市民情報とを合体して一緒に統合 GIS の形で、分かりやすくよく見える姿で具体的な情報としてインターネット等を介して公開していく手法等に関し、京都府にて、実際に原体験された経験をお話いただきました。

市民による自律性と自発性が、そしてそのなかで、監査制度をも取り上げた形で、それがボトムアップとして収集されてこそ、すぐれた情報となるということを強く主張されました。



結 論

- いずれも実践の場で、試行錯誤を繰り返しながら、練りに練った書式(フォーマット)を作り上げられてきています。その過程の大切さを強調されています。それを実践し、評価し、改訂し、最後に固めてこられています、まさにこれが情報システム構築で成功するためのセオリーでもあること。
- 里山の事実を知る、現実を把握する。そして、「生きものとしての全体」を、里山の年間単位でのリズムとしてつかむ。そこで蓄積された情報を、その調査に参加しているメンバーと共有する。
- 市民情報センター等を構築し、必要に応じて行政側にも情報を提供する。なりわい(生業)再生と、新たなコミュニケーション手段の再構築につながると同時に、その構築過程でさら新たな人材育成に、地域コーディネーター育成のためのツールとして活用をする
- 都道府県や県や国の生物多様性センター等で集積した基礎データ、各種の地域データ等をさらに、市民ベースでも共有できる仕組みとして、情報面での共生を行い、結果として統合 GIS を介した情報発信が可能として、生活に役に立つ情報を発信方法など、実践できるプロセスの在り方がこの分科会のなかで、多様に見出されてきたと考えています。

まとめ

- 1 「里山に託す私どもの未来」が、里山シンポジウム実行委員会の発足時の中心テーマです。
これ以上深い意味をもった言葉はないと、再認識し、このテーマをしっかりと固めるべきこと
- 2 生物多様性では、今後最も大事なことは、地域からのボトムアップされた情報が、どんどん発信されて、かつそれを取りまとめられる、多様で多数の地域コーディネーター育成が急務ということ。
- 3 「里山はなりわいの場、ものづくりの現場であり、アイデアを紡ぐ、まさに実験工房」としての場であるということ。
- 4 情報の共有そのものが、具体的にどうあるべきかの、その指針となるものが、今回のこの分科会で出てきたのではないかと考えています。その成果はとても素晴らしいと考えています。